

# 教 仁 名 聞

第55号  
(発行日)  
2015年4月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
**63-4488**  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》  
○ 〈同朋の会〉  
毎月22日 午後2時始。  
○ 〈念仏座談会〉  
毎月2日と12日 午後3時始  
○ 〈聖典学習会〉  
毎月6日 午後7時始。  
○ 〈真宗入門講座〉  
毎月18日 午後6時30分始。  
\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## 光明てらしてたえざれば

光明てらしてたえざれば  
不断光仏となづけたり  
聞光力のゆえなれば  
心不断にて往生す

現代語訳 (アミダ仏の光明は一切の衆生を絶えまなく照らして下さるゆえ、アミダ仏を不断光仏とも名づけられた。聞かせていただいているアミダ仏の光明の用き(力)は私たちの心に信心となつて届き、信心は絶えることなく用き続けて私たちを浄土に往生させて下さる。)

○ この親鸞聖人のご和讃も曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』の「光明、一切の時にあまねく照らす。ゆえに仏をまた不断光と号けたてまつる。光力を聞くがゆえに、心断えずしてみな往生を得。」を受けて作られたものです。これはアミダ仏の光明の徳の一つである〈不断光〉のお徳をたたえられたご和讃です。不断とは「間断なく連続し

て断絶しない」ということで

この世のさまざまな形あるものはみな、初めがあれば終わりがあります。庭の木々も草花も生まれてはやがて枯れていきます。祖父母も親もしばらくこの世にいますだけで、亡き人になっていきます。私の身体もやがて絶え果てるでしょう。太陽も月も地球も数十億年の後には消滅するそうです。そうすると、いつまでも続いている個物はこの世には一つもありません。

愛する人も憎い人もしばらくこの世にいます。可愛い子や孫も一緒におられるのはしばらくです。また、所有している不動産もいつまでも自分の物ではなく、事情が変わると他者の物になります。少なくとも自分が死ねば他者のものになります。ですから「いつまでも私の物」と思わない方が良いでしょう。でもこう達観できれば、軽やかに生きられるでしょうが、どうしても「我が物」と執着

する心が離れない

ので、煩い悩みがなくならないのが凡夫の私(たち)です。また、現在日本は平和だといつてもいつまでも続くとはいえないですね。あれよあれよという間に戦争に引き込まれる、それが世界の歴史ですね。どこかの国からミサイル一発撃たれたら、「それやっつけろ」と反撃して、ドンパチやりかねないです。戦争状態もいつまでも続きませんが、平和もいつまでも続きません。ただできるだけ悪い方向へ行かないように芽がでたら摘むようにしなければならぬでしょう。

話はあちこちに飛びました。「常住にして不断に連続してやまないもの」はこの世のものにはありませんが、しかし「不断にして絶えないもの」はあります。それは「光明無量・寿命無量」だと、釈尊はお説

《念佛寺永代経法要》  
四月二十二日(水)  
午後二時始

(朝日カルチャーセンター講師)  
法話 星野親行 師  
\*同日(四月二十二日) 午前十時・勤行法話  
(念佛寺住職の法話です)

き下さっています。「光はかりなく、いのちはかりない」そういう用きがある、それがアミダであり、その用きは限りなき良き功德をもっているの、(阿弥陀仏)となづけられています。

そういう生滅を超えた常住不変なるもの、無量なる光明であり寿命であるもの(アミダ)を自覚的に悟りきったお方が釈尊だといえましょう。そして釈尊は、アミダ仏の光は断えまなく私たちにはたらきかけ、照らし続けておられるとお説き下さっています。そのお照らしにもよおされて、私たちに〈宗教心〉が起こってきます。『無量寿経』には、釈尊もお若い頃「老・病・死を見て世の非常を」感じて、悟りの道を求められました。この肉体が衰えていく悲しみ、病気になる不安、死なねばならないという空しさを

感じ、老病死を超えた常住なるまことを求めようとの心(菩提心)いわば宗教心を起こされたのです。これはアマダ仏の光明のお照らしが釈尊の内に発現し、やむにやまれぬ宗教心として燃え上がったのでしよう。

それは勿論、釈尊だけではなくいつでもだれの上にも起こりえるのです。こんな話を昔、聞きました。

京都の大融寺にいた円智坊という僧侶はもともと大阪の人でした。彼は若い頃大阪で、紀伊国屋亦右衛門という大商人のところで奉公していま

た。正直だったので、主人が百両の資本を与え、彼に商売をさせてやりました。それを元手に稼ぎに稼ぎ、もうけにもうけて、百両を三千両に、三千両を万両に、万両を十万両にしました。ところがある日、彼はもうけた十万両をもつて主人のところに行き、そつくりその大金を主人の紀伊国屋にゆずり与えました。そして自分は大融寺に出家して生涯佛道を求めました。彼の歌に、

『おちてゆく 奈落の底を  
のぞきみん いかほど欲の  
ふかき穴ぞと』  
円智坊は自分の底無しの欲

望に驚き、「これでは自分はだめになる」と感じて仏法を専ら求めるようになったのですね。それは、損した得した、勝った負けたという世間の価値観を超えた真実を求めたいという宗教心が彼に起こったからでしょう。

またこんな話も聞いたことがあります。

近世、高槻市のあるお寺の真宗門徒で非常に信心の厚い方が居て、その方がどうして真宗の教えを聞き厚い信心の方になられたかというお話です。

彼は若い頃暴れん坊でやぐざでした。そしてある時、やぐざのいさかいがあつて、血の気の多い彼は怒りに燃え、合い口を懐に入れて敵に乗り込もうと、いのちの危険もかえりみずに家を飛び出していきましました。かなり走つて途中、石の上に腰をかけて一休みしていました。そろそろ日が暮れかかつてあたりが薄暗くなつてきました。彼が夕闇の中じつと坐っていると、突然近くのお寺の梵鐘をつく音が「ごーん」と彼の耳に入ってきました。聞くとはなしに彼の耳に、梵鐘の「ごーん」という響きがした時、その音が

彼の魂に響きました。「俺は何をしようとしているのか」と何かしら、何とも言えないやりきれない気分になつたそうです。いいよのない空しさというかさびしさというかわれたのでした。そしてとうとう殴り込みに行くのを止めて家に帰りました。そういう経験が縁となり、一転してやぐざから足を洗い仏法を聞くようになりました。実に熱心に聴聞してとうとうご信心をいただいたのでした。

円智坊にしてもやぐざだった彼にしても、そういう世間の欲得や勝ち負けの価値を超えた真実を求めようという宗教心が人間の心に起こるのは、それは真実そのものの用き、いわばアマダ仏の光明が絶え間なく人々に働きかけ照らし続けて下さつていたからでしょう。そしてその力によって、縁が熟して人の心に宗教心として湧き上がってきたのであらうと思ひます。

「光明てらしてたえざれば」こそ、私たちは仏法を聞く身にさせていただいたのだと、このご和讃から教えられます。光明のおてらしの力によって、今まで外ばかり見ていた私たちが「ふっと」自分の有様、

自分の心、自分の人生に目に向き、自分の有様に対して「これでいいのか」「こんな人生でいいのか」「一体人生で何なのか」「私は一体どうなりたいのか」「私は死んでどこへいくのか」といった、人生の根本問題が自分の問いになるのです。それは阿弥陀仏のお照らしに自分自身が照らし出されてくるからでありましょう。

こういう問いとか欲求は十四才頃から起こりえるといわれています。十四才ぐらいからそういう欲求は自覚化されるのでしよう。法然聖人(源空)は

源空三五のよわいこと

無常のごとわりやとりつ

厭離の素懐をあらわして

菩提のみちこそいらしめし

と宗祖によって詠われていますが、数えて十五才の時にこの世の無常を感じて、無常の世を厭い常住の領域を求めると菩提(さとり)の道に入られ、仏法を求められました。

ですから中学生だからといつて、その心根は幼いように思つてはいけないと思ひます。十四才ですでに真実を求めようと思ひ立つことが当然ありえるのです。逆に七十才、八十才になつても、この世の利

害損得や愛憎や日常の道徳にしか関心がない場合も少なくありません。

次に「聞光力のゆえなれば 心不断にて往生す」の(聞光力)というのは、「聞かせていただく光の力(はたらき)」ということ。光力とはアマダ仏の光明の用き、本願力のことです。この(光)とは心光のはたらきです。物質の光ではありません。アマダ仏の大悲の心の光が私の当体である煩惱の心に働きかけ、てらし、そして摂取して下さるのです。

「心不断にて往生す」というのは、私たちの凡心に届いて下さつた信心は、アマダの断えざる光明の用き(力)によつてであり、私がどのような状態になろうとも、離れず相続されて浄土に至らしめて下さる、という意味です。これは不思議なことですね。

私たちの心は変わりどうして、「こうである」「ああである」と決めていても、自分の思つたことや考えたことや感激したことは、時が過ぎると消えたり薄くなつてしまいきます。当てにならないし、頼りにならない私たちの心です。そういう意味から云うと、

(また話は横にそれますが)、他者にたいして「あの人はこんな人だ」と評価しても、それはその時の評価であって当てにならず、立場や事情が変わると「こんな人とは思わなかった」とか「案外、いい人だ」とかでふらふらしています。自分の決めたことは本当に当てなりません。ですから人に良し悪しをつけて、それが変わらぬように思う必要はなく、「今はそう思っているだけに過ぎない、次にはまたどう変わるか当てにならない」と、自分の判断を固定化せず、柔軟に考えておくと、あんがい人間関係は軽やかにいくものです。

自分の思いに何が湧こうとも、南無阿弥陀仏と称えていく。お念仏を聞いていく。

そんな中から、煩惱を煩惱と知らされていき、煩惱の心に常に付き従って下さる仏のお心が知らされてきます。

そのようなことで私たちの心や思いは次々に変わっても、阿弥陀仏の「ここにいて、汝を助ける」という大悲の信心はこわれもせず、なくなりもせず、途絶えもせず、ともに私に離れずつねに寄り添って下さいます。信心は私たちの

心がけやら努力では決して続かないのであって、不可思議な如来の不断光のお徳の力によつて相續されていくのでありましょう。この不断光あればこそ、私がかうかしかしていても、忘れていても、「心不断にて」で、信心は不断に相續され、私たち一人一人を浄土へ浄土へと引き連れて下さる(「往生す」と、お聞きしています。有難いですね。

それにしても心の領域は広く深いのです。ともすると私たちは、心は脳のはたらきから生まれる小さな現象のようになっているが、そうではなくて、心は脳を超えた広くて深いはたらきなのです。ただ私たちは自我の表層意識だけで日常生活をおくっていますから、いつのまにか心はせまくて小さなもののように思ってしまうのです。山も川も太陽も星々も、私たちの心のはたらき無くしては知りようもなく、知らなければ無

いも同然です。心があるから世界があり宇宙があるといえます。物質がないと言っているのではありません。ただ、物質があつても心がなければ、物質を物質とすら知りようがありません。

世界だけではありません。悲しいも嬉しいも苦しいも楽しいも、親があり兄弟があり、愛したりケンカしたり、人間生活、人生全体は私たちに心があつてこそ成り立ちます。肉迷い苦しむのは心です。肉体は迷いもしないし苦しみもしない。その迷い苦しむ心を救うて下さるのは大いなる慈悲の心であり、アミダの光明です。

アミダ仏の光を聞けば、アミダ仏に摂取されるのです。光を聞くというのは、具体的にどういふ事かといえますと、アミダ仏の光明は言葉となつて私たちに喚びかけて下さいます。仏心の光は真実の言葉となつてはたらいて下さるのです。その言葉とは(南無阿弥陀仏)のお名号です。ですから光を聞くと南無阿弥陀仏を聞くということ。聞くと言つてもおうように聞くのではなくて、聞き受けること、聞いて信じていることです。

「極重の悪人よ、私が引き受ける」「助ける」「まかせよ」と喚んで下さるアミダ仏の仰せが南無阿弥陀仏なのです。この仰せを仰せのまま「ああ有難い」と聞いていることが

信じていることなのです。聞くとは「助ける、たのめ」の仰せを聞いていることです。聞くところに不思議にもアミダ仏の心光の力は私の心に届いて離れなくなります。どこどこまでも離れなくなつて続いて下さるのです。不思議なことです。

離れなくなつて下さるといつても、アミダ仏のお心がどこからか遠いところから私のところに来てきて離れなくなるというのではないのです。私たちが信じる前から一切衆生をてらしづめなのですが、私から、もう一つ言えば自分自分の目を閉じていたから、その光にあえなかつたのです。そして光に気がついたので

アミダ仏の光明の力によるのです。光のおてらしにうながされ、機縁が熟して光の用きを善知識の説法として聞き、光の用きを名号として称えしめられ聞かされるなかで、仏心大悲は私の心に浸透し、信心として光力(本願力)を信じるにいたるのであります。う。〈信の一念〉とは光の力が私の心に主体化しはじめたことです。この光の力が私(心・業識)を浄土に導き、浄土

へ連れて行き、浄土に生まれさせて下さると、お聞かせいただいています。

アミダ仏のお心はひとたび私の心に届くと離れず、断絶せず、どこまでも相續して下さる。そしてついにはアミダ仏のお心に一つにして下さる。一つになることが私たちが佛になるということです。佛になるのは浄土に生まれた時に佛になると、いわれています。

このようにアミダ仏の光は万人を悠久の過去から悠久の未来にわたつてつらし続けて下さる、このような光徳を(不断光)と讃えられているのがこのご和讃です。不断光の徳ましますゆえに、私たちは救いに遇わせていただき、浄土に往生させていただけるのであります。(了)

### 〈遠方法話予定〉

- ① 四月十日(二時始)・十一日(四時まで)。広島市、龍善寺。
- ② 四月十七日(十時始)。福井別院。座談有。
- ③ 五月十四日(十時始)名古屋別院。座談有。
- ④ 五月十九日(二時始)〜二十一日福井別院。座談有。
- ⑤ 六月十三日(十時始)。福井別院。座談有。



# 木村無相さんの法信

31

(昭和五十八年九月八日のお便りの続きです。無相さん七九歳。往生される四ヶ月前のお便りです。前月号からの続きです)

\* \* \*

わかりますか。どれだけ、信後に、如来に背き、如来の本願を疑っても、もう、如来といえども、これだけ背けば、もうお見捨てであろう、これだけたびたび疑惑をおこせば、さすがの如来も、もう、私の自性にまかせて、地獄に落とすであろう、もういよいよ出離の縁あることなしであろうと、自分でいくら、そう思っても、如来の「撰取不捨のお力」から、もれることは出来ないのです。

一とたび本願を信じ、  
念佛申す身になれば――

また、如来の「果遂」の誓いからいただいても、果遂の誓いは、

定散自力の称名は

果遂の誓いに帰してこそ

教えざれども(他力)自然に

真如の門に転入する

で、ご和讃の文面から、いただくと、

定散自力の称名から

唯念佛の真如の門への転入の時

ただ一回だけ「果遂」の誓いはハタラクだけのようと思われるが、ソウデなく、一生、果遂の誓願力は、この業、煩惱の身にハタライテ下さって、千たび、万たび、「信後」に疑惑をおこしても、「果遂の誓願力」の

ゆえに、千たび万たびでも、真如の門に、徒だ念仏、定散自力の信の念佛の身に転落しても、果遂の誓願力は、一生、根よく、その、果遂のお言葉通りに、この私を、疑惑仏智を晴らして下さるのであります。一度び、「唯念佛の身にして下された」トコロに、帰らせて下さるのであります。千たびでも、万たびでも、親に背き、疑惑を「信後」におこしても、お見捨てはないのであります。

○

ソレは、二十九才で入信されたという聖人が、それから十年、二十年、経ったアトでも、三部経を千部読誦して衆生を救わんとするような自力作善の心をおこされたとしても、「ああ、そうであったか」と、そのマチガイに、気がつかせて下されて、またモトの「唯念佛」の身に、立ちかえらせて下された如くに、それは、「撰取不捨の利益」からか「果遂の誓いのゆえ」か、その区別はわからぬが、「信後」に、疑惑を、千たび万たびおこしても、もうふたたび、六道輪廻の身になることは出来ないのではありませんまいか。

○

念佛に本具するところの、四十八願の誓願力のゆえに、果遂の誓いのゆえに、撰取不捨の利益のゆえに、たとい信後に千たび万たび、疑惑をおこそうとも、信前の千倍万倍の「疑惑」をおこそうとも、ひと度、信じて念佛もうす身になれば、如来に、如

来の仰せのままに「生死出離」をまかせ、ただ念佛申す身になれば、あるいは「信後」にどれだけ疑惑をおこそうとも、もうモトの六道輪廻の身になることは出来ないのではありませんまいか。たとい、またモトのよいうな、六道輪廻の身になっても、モトモトで、それ以上の大変なことはおこりません。

また、たとい、「信後」に、疑惑をおこして如来の「撰取不捨のお力」「果遂の力」及ばずして、またモトの、六道輪廻の身になっても、モトモトではありませぬか。

「たとい法然上人にすかされまいらせて念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからく候」

「たとい信後に、疑惑がおこって、撰取不捨の力も及ばず、果遂の願力も及ばずして、出離の縁あることなしの身になっても、さらに後悔すべからく候」

○

紀さん、  
イワユル信前のことも、信後のことも、信も、行も、ウタガイも、助かるも、助からぬも、ただよき人の仰せのままに、ただ念佛申すより、ホカないのではないでしょうか。

「極重悪人唯称仏」

で、どうしようもない極重悪人の身は、「唯称仏」「称我名字」の仰せのホカ、又、仰せのままに

ただ念佛申す

ただナムアマミダブツといただくホカは無いです。ありますまいか。

○

たとい、どうあるにしても、今の私は、  
念佛詩・歎異抄

にある如く、ただ念佛のホカは無いのであります。

〔歎異抄拝読六十一年〕

七十八の今日にして

のこりしものは「ただ念佛」――

わが生き死にの道はただ

ただ念佛のひとすじ道――

ただ念佛はわたしの白道――

ただ念佛はわたしのイノチ――

で、七十八の私は、時代おくれであろうと、なんであろうと、千万人に笑われても、お東でどういろうと、お西でどういろうと、ただ念佛のホカはないのであります。

○

紀さんの手紙の最後には

木村様の詩が南御堂というナンバ別院の月刊紙に出ておりました。懐かしいことでした。いじもながらご懇切なお便り有難うございます。くれぐれもお身体(ご)自愛下さい。

とありますが「南御堂」は私のところへも来ており、先日、七月号にかの一面の左上に、念佛詩の一部がのせられている(今月の掲示板として)のに気がついて、私もなつかしくなつかしく思ったのであります。去年の、正月ごろのナンバ別院の掲示板にも、「念佛詩抄」中の、

元旦や めでたきものは お念佛

かナニか、忘れましたが、私の句が書かれていたと、住友銀行に出ている御法に關係の無い、四十五、六になるもう、三十年にもなる若い、古い友だちが、「うれしかった」と知らせてくれました。

(以下略)